

の場合、このモデルは図で表現されるのですが、最終的には数理的、力学的解釈に耐え得るものでなければなりません。

最近では気象衛星の写真のみが真であっていわゆる天気図上のパターンは主観的なものであると思ひこむ傾向がないでもありませんが、気象衛星の写真を何枚ならべてもそれは解析とは言いえぬのでありますし、同様に写真についての思い付きをのべたからといって発見であるとは言いえぬのです。ある一つの解釈を可能な限りあらゆる角度から検討し、すべての反対尋問を一つ一つ論破するために傍証を固めてゆくといったような手数をかけた仕事が解析に要求されるのであります。

さらになお、最近ではコンピュータを解析の仕事に応用する風潮も高まって来ました。これは喜ぶべきことでありますが、ここでもやみくもに多量のデータを処理したからとて洞察力に富んだ解析結果が得られるとは限りません。ここでも自分の手と目を通じて考えることの方がはるかに大切であり、なおすぐれた発見や結論に早く到達する

ことが多いのであります。コンピュータを用いると複雑な計算が解けるという利点はありますが、その反面、コンピュータを用いるために問題の設定、アプローチの仕方がはなはだしく制限される場合が多いのです。したがって解析者が取扱わなければならない多くの問題が取り残されているのです。定性的なものは常に定量的結論におとっているというわけではありません。

解析はまた、実験観測とも大いに異なっています。新しい観測方法を創ることも大切であります。毎日のルーチン観測値そのものが解析者にとっては新しい発見、新しい方法を考えるチャンスなのであります。一見同じような現象でも詳しくみると千差万別で、何故そうなのかという新しい疑問が湧いてくるのであって、必ずしも新しい機械や新しい組織を必要とはしないのです。むしろ処理し切れないで空しく捨てられてゆくデータや問題が実に多いのであります。この点についても今後、解析にとりくむ人々に希望を託する次第であります。



YOSHINO, M.M. 著

Climate in a small area—An introduction to local meteorology

東京大学出版会、1975、B 5 版、549 頁、8,800 円

著者の吉野正敏教授は紹介するまでもなく日本における気象学者の権威の一人である。ヨーロッパにもしばしば行き、局地気候の研究を精力的にすすめている。

前に地人書館から「小気候」と題する著書を出版されているが、一口にいえば、本書はその改定版である。といっても、前者は日本語、後者は英文で書かれており、内容ははるかに充実しており、全く新しい著書といった方が適当である。この種の本としては、R. Geiger の「Das Klimer der Bodennahen Luftschrift」(1927) が世界的に有名であるが、その後多くの研究が進み、多少古典的なものとなった。本書はこれに代るものといってもよいであろう。

第 1 章 局地気候と微気候、第 2 章 研究の歴史、第 3 章 小地域における地表と気候、第 4 章 小地域における地形と気候、第 5 章 局地気流と天気、第 6 章 局地気候、微気候と自然、の 6 章から成立っている。風による変形樹の写真、小地域の風、気温、降水量の分布図、気候のスケール、気温減率などの表も豊富にのせられており、視覚的にも大いに理解しやすい。英文である点に多少抵抗を感ずる人もあるかもしれないが、わかりやすく、実際にはそれほど苦にはならないであろう。

本書は気象学者が書いただけにその特色がよく現れている。局地気候、微気候に関する研究が体系づけられてたんに記述されており、この方面のことを勉強したり、研究する際には非常に有用な著書であろう。巻末には約 1,500 にのほる文献がのせられており、著書索引、事項索引、地名索引もあって、一種の事典的役割りをはたしている。

近年公害災害とも関連し、気象環境が社会生活においても深い関心をもたれて来ている。この際、局地気候、微気候の問題は、一つの要であり、応用気候、応用気象における一つの中心問題である。この意味でも気象に関係のある職場の図書室には是非そろえておいて欲しい著書の一つである。

(高橋浩一郎)